

1 試合前

- (1) 審判は公認野球規則・競技者必携・協会大会運営規定等の熟読に努め、試合には必携すること。
- (2) 試合開始予定時刻の1時間前に到着し、球場責任者(以下、球責と記)に報告すること。(審判認定証の携帯必須)
(チーム帯同審判も同様であるが、前試合でベンチ入りの場合は必ず球責に報告しておくこと)
- (3) 審判員は指定された服装とし、統一(球審の上衣は別途)すること。
(半袖審判服に長袖アンダーウェアは不可とする。なお病気等の場合は可)
審判シューズの色は、球審・塁審とも黒又は白の無地とする。
(補足) シューズは野球の審判用又はトレーニングシューズ(アップシューズ)とする。
4氏審判員のシューズの色の混在は可とする。
白シューズは熱中症対策が目的であるが通年で可とする。
靴下の色は、白シューズの場合は黒・紺又は白・灰とし、黒シューズの場合は黒・紺とする。(短ソックスは不可)
アンダーウェアは、審判服が半袖の場合は黒・紺又は白、長袖の場合は黒・紺とする。
(審判服から透けるため“がら”のウェアは不可)
- (4) グランド作りに協力後、ライン・ベース・マウンド状況等を最終確認すること。
(過去に、投手板位置や塁ベース位置の間違いがいくつかあり)
- (5) 球責と審判員で特別規則・球場特別ルールの確認をすること。
気温が高いときは3回裏に5分程度の休憩タイムをとる。球責と相談の上決定し、トス時に両チームに周知する。
また猛暑の場合は、休憩タイムを2回裏と4回裏にすることも球責と相談する。
- (6) 試合開始前の打合せは開始時刻30分前には行うこと。(帯同審判も含む)
- (7) メンバー表交換・先攻・後攻決めに球審は立会い、注意事項・特別ルールなどの確認をすること。
メンバー表の控え選手の10番の欄を確認し、DH制の有無を確認すること。(空欄はDH無し、名前ありはDH有り)
服装は審判服とする。(監督・選手もユニフォームとし指導する。寒い場合はコート可)
- (8) シートノック時に、塁審は道具確認をすること。
特に、捕手マスクとヘルメットのSGマーク、ヘルメットのひび割れ、捕手のファウルカップなど安全上の道具の確認
また、R7年に制限された一般用の複合バットが無いことの確認
シートノック時に、捕手がマスクをつけてない場合は、注意して付けさせる。
- (9) 白線でのベンチでは、安全対応としてラインから30cm以内にヘルメットなど物を置かないよう指導すること。
- (10) 試合中の捕手の仕度は、ネクストサークル付近で、指導者が手伝って行くことを指導すること。
- (11) シートノック時の道具等の確認終了後は、球審とともに審判控室等に待機することが望ましい。

2 試合中

- (1) 審判員は公正でなければならない、むやみに選手や指導者などと会話をしないこと。
- (2) 投球練習中での審判の立ち位置を励行すること。(塁間の4分の1程度・ベースから10m程度・セカンドはベースの後方)
- (3) 走者なしの場合は、投球動作に入ったら、スタンディングで構える。
走者ありの場合は、投手が投手板に軸足を置いた時点で、ハンズ・オン・ニーで構える。
- (4) 投手板の刷毛による清掃及び各ベースの位置・清掃を心がけること。
- (5) 試合進行のスピードアップのため、選手の追い出し・捕手の仕度に心がけること。
- (6) 守備妨害・走塁妨害・ボーク・タイムプレイ・危険行為などを意識しておくこと。

- (7) 時間内で6回終了することを心がけて試合進行に努めること。
- (8) 給水タイムはグラウンド外にて行い、共有事項の再確認をすること。
給水タイム以外でも、イニング間に給水をとり熱中症予防に努める。
- (9) 監督又は該当選手から確認要請がある場合、または審判員自ら判定に疑義がある場合は、四審が協議して判断すること。
 - ①当初判定に固辞せずに、正しい方向に導くよう四審で協議する。
 - ②四審での協議は最終判定であり、むやみに再協議はしないこと。
 - ③四審での協議で判断ができない場合は、控え審判を交え協議すること。
- (10) 選手の安全対策については十分に注視し、指導または対処すること。例えば
 - ①バットの素振りを順守させる。(準備投球の際にネクストバッターサークルでのみ可)
 - ②投球時に捕手が打者に近い場合(スイングバットがミットにあたる危険性があたる場合)は注意する。
 - ③死球は頭部だけでなく心臓部(背中側も)に受けたときは臨時代走を出す。
また走者への送球が頭部などに当たった場合も同様である。
- (11) 選手に対して威圧的な言い方をしないこと。(例えば、守備につくときに「走れ！」ではなく「頑張っていこう！」など)
- (12) 監督からのメンバー交代は、交代選手が多い場合は、監督と一緒に放送前で聞くことは良いが、球審も変更を記録すること。
- (13) 作成タイムが取られた場合には、タイム後に取った方の監督と本部に「監督〇回、選手〇回」などと報告すること。
- (14) 試合終了後の挨拶完了まで見とどけるように立ち会うこと。
(いわゆるサヨナラのケースでは、アピールプレイが無いことを確認してから「集合」の合図をかけること)
- (15) 試合終了時の球審の宣言用語は「ゲーム」から「礼」に変更する。 (2026改定)

3 試合後

- (1) 試合終了後には、必ず振り返りのミーティングを行い今後の材料とすること。
- (2) 審判記録は、球審が中心になり記載すること。
(記録には審判上の問題だけでなく、試合運営上の問題なども記すこと)

4 その他、審判技術上の事項

- (1) 審判の基本的な技術として以下の様な点を常に意識すること。
 - ①判定にあたっては、一番見やすい箇所に位置し、必ず静止してプレーを見る。
 - ②完全捕球などを確実に確認してからジャッジする。
 - ③際どいプレーの判定は、オーバーアクションし、メリハリの利いたジャッジをする。
- (2) 判定のゼスチャーは高野連の指導とおり以下とする。
 - ①投球判定のストライクのゼスチャーは、ドアノックスタイルとする。(弓引きポーズなどは不可)
 - ②アウトのゼスチャーも、ドアノックスタイルとする。(パンチングポーズなどは不可)
- (3) ライン際の飛球については、従来通り①キャッチなどの判定の後に、②フェア又はファウルゾーンの指差し(ポイント)とする。

以上